

機関番号	研究種目番号	審査区分番号	細目番号	分割番号	整理番号
14301	06	1	2901		0003

平成27年度(2015年度) 基盤研究(C)(一般) 研究計画調書

平成26年10月29日
2版

新規

研究種目	基盤研究(C)	審査区分	一般				
分野	人文学						
分科	哲学						
細目	哲学・倫理学						
細目表 キーワード	倫理学原論・各論						
細目表以外の キーワード	功利主義、進化論						
研究代表者 氏名	(フリガナ)	コダマ サトシ					
	(漢字等)	児玉 聡					
所属研究機関	京都大学						
部局	文学研究科						
職	准教授						
研究課題名	功利主義と進化論の理論的・思想史的關係についての研究						
研究経費 (千円未満の 端数は切り 捨てる)	年度	研究経費 (千円)	使用内訳(千円)				
			設備備品費	消耗品費	旅費	人件費・謝金	その他
	平成27年度	980	300	360	150	140	30
	平成28年度	1,120	0	230	650	140	100
	平成29年度	1,020	0	230	550	140	100
	平成30年度	0	0	0	0	0	0
	平成31年度	0	0	0	0	0	0
総計	3,120	300	820	1,350	420	230	
開示希望の有無	審査結果の開示を希望する						
研究計画最終年度前年度応募	--						

研究目的

本欄には、研究の全体構想及びその中で本研究の具体的な目的について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、適宜文献を引用しつつ記述し、特に次の点については、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください(記述に当たっては、「科学研究費助成事業における審査及び評価に関する規程」(公募要領 70 頁参照)を参考にしてください。)

研究の学術的背景(本研究に関連する国内・国外の研究動向及び位置づけ、応募者のこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯、これまでの研究成果を進展させる場合にはその内容等)

研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか

当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

研究目的(概要) 当該研究計画の目的について、簡潔にまとめて記述してください。

本研究では、「進化論は倫理に対してどのような含意を持つのか」というテーマについて、規範理論の一つである功利主義を擁護する論者がどのようにこのテーマに取り組んできたかという視点から検討を行う。ダーウィンと同時代人であった J.S. ミルやシジウィックがダーウィンの進化論をどう評価したかという点も検討するが、本研究で中心となるのは、進化論が倫理に対して持つ含意について詳細に検討しているピーター・シンガーの議論の批判的検討である。これらの検討を通じて、進化論および近年の脳科学や認知心理学を用いた道徳心理学の研究が規範理論に対して持つ含意を明らかにすることを目的とする。

研究の学術的背景

進化論がわれわれの倫理にどのような影響をもたらすかという問いは、すでに内井惣七が『進化論と倫理』(1996)で詳述しているように、ダーウィンの時代から論じられているテーマである。しかし、この問いが現代において議論されるようになったのは、E.O. ウィルソンの『社会生物学』(1975)に端を発するいわゆる社会生物学論争によるところが大きい。ウィルソンは、同書および『人間の本性について』(1978)において、人間の性格形成は文化や教育のみによってなされるとする当時の考え方を批判し、遺伝の影響が大きいことを主張しただけでなく、(のちに進化心理学と呼ばれることになる)社会生物学の知見が深まることにより、人間の倫理のあり方が解明されるだけでなく、倫理の方向性も定まると考えた。このように進化心理学が倫理を説明するだけでなく正当化も行うという立場を佐倉統は「進化心理学の強い主張」と呼び、歴史的には社会進化論を問いたスペンサーなどもこのカテゴリーに入れている(佐倉『進化論の挑戦』1997, 2003 改版)。

それに対して、進化心理学はわれわれの倫理の由来は説明できるが、倫理の正当化はできないとする立場を佐倉は「進化心理学の弱い主張」と呼んでいる。佐倉は近年の進化倫理学者のマイケル・ルースをこのカテゴリーに入れているが、功利主義者のピーター・シンガーもここに入れることができるだろう。シンガーが一早くウィルソンの批判を行い、進化論が倫理学に持つ含意を検討したことは、国内ではあまり知られていないように思われる(内井 1996 でもシンガーは言及されていない)。しかし、シンガーは 1981 年という比較的早い段階で *The Expanding Circle* という著作でウィルソンの議論および進化論が倫理に対して持つ含意を検討しており、道徳的直観が進化論的に説明されることは、それに依拠する直観主義にとっては不利であり、直観を自明視しない功利主義にとっては有利であることを看取した。シンガーはその後進化心理学や近年の認知心理学あるいは行動経済学の知見を最大限有効に使う形で自身の理論を展開している(たとえば『あなたが救える命』2009 など)。また、fMRI を用いたトロリー問題の研究で知られる J・グリーンも、近著 *Moral Tribes* (2013)において、自分の利益よりも社会の利益を優先するが他の社会の利害は軽視する傾向にある常識道徳は、進化論的には十分に説明できるが、グローバル化した現代の倫理としては限界があるとして、「メタ道徳」としての功利主義を主張している。

このように見ると、功利主義と進化論は親和性が高いように見受けられるが、歴史的に見れば必ずしもそうではなかった。功利主義も進化論もイギリス経験論の伝統に端を発していると考えられるが、たとえば J.S. ミルは『論理学体系』の注の中で、ダーウィンの理論は「仮説としては確立されているが証明はなされていない」と論じて、まだ科学理論であるとは認めていなかった(D.L. Hull, 'Why Did Darwin Fail? The Role of John Stuart Mill' in *Biology and Epistemology* 2000)。また、ダーウィンが『人間の由来』を上梓した 1871 年の 3 年後に主著『倫理学の諸方法』を公表した功利主義者シジウィックも、進化論は倫理学に対してはいかなる含意もないとして、版を重ねても主著の中に進化論の話は一切入ることはなかった(H. Lillehammer, *Methods of ethics and the descent of man: Darwin and Sidgwick on ethics and evolution, Biology and*

研究目的(つづき)

Philosophy 25:361-378, 2010)。進化論と倫理は無関係だとする立場を佐倉(1997)は「反進化倫理学」と呼んでいるが、少なくともシジウィックの立場はこれに近いだろう。20世紀後半の功利主義者のR.M.ヘアも進化論の話は論じておらず、進化論が倫理学、とくに功利主義に対して持つ含意についての議論はシンガーが論じるまでほとんどなかったと言える。しかし、そのシンガー(およびグリーン)も、進化論によって支持される身近な者への偏愛と、功利主義が支持する普遍性の間の緊張関係について理論的に十分に解決できているとは言えず、また功利主義自体の基礎付けに関しても、問題を抱えていると考えられる。

さらに、近年においては、Julian Savulescuを筆頭に、進化によって備わったわれわれの人間本性は、遠い国の人々の利益や、環境問題のような将来世代の利益が問題となる現代社会の問題に対応することができていないという理由から、道徳的能力を遺伝学や薬理学等の方法によってエンハンスする必要があると論じる論者もいる(Ingmar Persson and Julian Savulescu, *Unfit for the Future*, 2012)。このようなことが技術的に可能かどうかはさておき、こうした主張はわれわれの人間本性と道徳性の関係の見直しを要求するものであり、今後の倫理学が進む方向に一定の影響を与えるのではないかと考えられる。

このような背景を踏まえ、本研究では、功利主義者たちがどのように進化論と向き合ってきたかを詳細に検討する。とりわけ、進化論が倫理に対して持つ含意について詳細に検討しているピーター・シンガーの議論を批判的に検討する。そして、こうした検討を通じて、進化論および近年の脳科学や認知心理学を用いた道徳心理学の研究が規範理論に対して持つ含意を明らかにすることを目的とする。

研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか

本研究では、思想史および現代的関心から、以下の三点に絞って検討を行う。

1. J.S.ミルやシジウィックといったいわゆる古典的功利主義者たちが、どのような理由から進化論を受け入れなかったか。この検討により、進化論と功利主義についての歴史的なつながりを明らかにするだけでなく、近年の功利主義者たちが進化論の含意を受け入れるさいに見落している点がないかどうかを確認する。
2. シンガーの進化論理解および、彼が進化論や最近の認知心理学系の研究(霊長類や乳児の道徳性についての研究、行動経済学など)をどのように自らの規範理論に組み込んでいるかを検討する。この検討により、功利主義とこれらの経験科学を調停しようとするシンガーの試みが本当にうまく行っているかどうかを明らかにする。
3. シンガー、グリーン、内井らの功利主義の基礎付けについて検討する。彼らはそれぞれ、進化論的知見は受け入れるが、事実と価値の峻別という観点から、進化論によって功利主義を正当化するということはしていない。そこで彼らがどのように規範理論としての功利主義をどのように正当化しているのか、またそれが成功しているのかについて明らかにする。

本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

進化論が倫理(および倫理学)にどういう含意を持つかという問いは、内井(1996)を除くと、国内の哲学・倫理学分野では十分に検討されてこなかったと言える。しかし、内井の著作以降、認知心理学や脳科学をベースとした道徳心理学が急速に興隆し、こうした研究およびそれに関連する進化心理学がわれわれの倫理、あるいは倫理学の構築においてどのような役割を果たすべきなのかという問いは、非常に重要なものとなっている。別の言い方をすると、これは、哲学的倫理学の知見とこうした経験科学の知見とは、理論的にどのような関係にあるのかという問いでもある。本研究は、この一見すると漠然とした問いを、規範理論の代表である功利主義に絞って思想史的、また現代的視点から吟味することを通じて具体的に検討する点で、国内外で例を見ない独創的な研究となっている。また、本研究を通じて、これまで十分に明らかではなかった、功利主義と進化論との思想史的なつながりおよび理論的關係が明らかになると思われ、それによって進化論と倫理の関係についても、佐倉(1997)のものを洗練させたいいくつかのモデルを提示することができると考える。さらに、このような作業を通じて、今後の倫理学と科学一般のあるべき関係の検討にもつながる点で、本研究の意義は非常に大きいと思われる。

研究計画・方法

本欄には、研究目的を達成するための具体的な研究計画・方法について、冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述した上で、平成27年度の計画と平成28年度以降の計画に分けて、適宜文献を引用しつつ、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。ここでは、研究が当初計画どおりに進まない時の対応など、多方面からの検討状況について述べるとともに、研究計画を遂行するための研究体制について、研究分担者とともに行う研究計画である場合は、研究代表者、研究分担者の具体的な役割（図表を用いる等）、学術的観点からの研究組織の必要性・妥当性及び研究目的との関連性についても述べてください。

また、研究体制の全体像を明らかにするため、連携研究者及び研究協力者（海外共同研究者、科研費への応募資格を有しない企業の研究者、その他技術者や知財専門家等の研究支援を行う者、大学院生等（氏名、員数を記入することも可））の役割についても記述してください。

なお、研究期間の途中で異動や退職等により研究環境が大きく変わる場合は、研究実施場所の確保や研究実施方法等についても記述してください。

研究計画・方法（概要） 研究目的を達成するための研究計画・方法について、簡潔にまとめて記述してください。

本研究では、「進化論は倫理に対してどのような含意を持つのか」というテーマについて、規範理論の一つである功利主義を擁護する論者がどのようにこのテーマに取り組んできたかという視点から検討を行う。主に下記で述べる三つの小テーマに絞って検討を行うが、本研究は基本的には文献研究という形で研究を進める。ただし、本研究は進化論や心理学の正確な理解を必要とするため、進化心理学や認知心理学を専門に研究している国内の研究者と適宜意見交換を行う。また、進化論と倫理の関係、および進化論と功利主義の関係について研究を行っている国内外の研究者とも意見交換を行うことにより、研究の適確さを確保すると同時に、国際的に高く評価される研究を実施する。

すでに述べたように、本研究では、「進化論は倫理に対してどのような含意を持つのか」というテーマについて、規範理論の一つである功利主義を擁護する論者がどのようにこのテーマに取り組んできたかという視点から検討を行う。とくに、本研究では、思想史および現代的関心から、以下の三点に絞って検討を行う予定である。

1. J.S.ミルやシジウィックといったいわゆる古典的功利主義者たちが、どのような理由から進化論を受け入れなかったか。
2. シンガーの進化論理解と、彼が進化論や最近の認知心理学系の研究(霊長類や乳児の道徳性についての研究、行動経済学など)をどのように自らの規範理論に組み込んでいるかを検討する。
3. シンガー、グリーン、内井らの功利主義の基礎付けについて検討する。

本研究では、基本的には文献研究という形で上記の三点についての検討を行う。本研究は進化論や心理学の正確な理解を必要とするため、進化心理学や認知心理学を専門に研究している国内の研究者と適宜意見交換を行う。また、進化論と倫理の関係、および進化論と功利主義の関係について研究を行っている国内外の研究者とも意見交換を行うことにより、研究の適確さを確保すると同時に、国際的に高く評価される研究を実施する。

27年度の計画

初年度は以下の三点について研究を実施する予定である。

1. 「J.S.ミルやシジウィックといったいわゆる古典的功利主義者たちが、どのような理由から進化論を受け入れなかったか」という問いについて、前出の Hull や Lillehammer の先行研究、および関連文献を網羅的にサーベイし、進化論と功利主義についての歴史的および理論的な関係について検討を行う。その結果は、イギリス哲学会等で発表を行い、次年度の『イギリス哲学研究』などに投稿する。なお、関連文献の収集にあたっては、申請者が所属する研究科の大学院生の補助を受ける予定である。
2. D.L. Hull and M. Ruse 編の *The Philosophy of Biology* (1998), Scott M. James, *An Introduction to Evolutionary Ethics* (2011), 内井惣七『進化論と倫理』(1996)など、進化論と倫理に関する文献を精読し、この分野の現状および論点に関する正確な理解を得る。

研究計画・方法(つづき)

3. 進化心理学や認知心理学の専門的知識に関して、専門家との意見交換を行う。具体的には、『利他学』(2011)などの著書がある名古屋工業大学の小田亮准教授、政治経済行動の進化論的基礎の研究をしている早稲田大学政治経済学術院の清水和巳教授らと意見交換することを想定している。

28年度の計画

前年度の研究を進めると共に、以下の研究を実施する。

1. 「シンガーの進化論理解および、彼が進化論や最近の認知心理学系の研究(霊長類や乳児の道徳性についての研究、行動経済学など)をどのように自らの規範理論に組み込んでいるか」という問いについて、進化論と倫理の関係について論じた彼の主要な著作(Peter Singer, *The Expanding Circle* (1981), *A Darwinian Left* (2000), 'Ethics and Intuitions' (2005), *The Life You Can Save* (2009)など)および二次文献を精読して、シンガーの進化論理解の正確さ、直観主義を批判するためにどのように進化論を用いているか、また近年の認知心理学系の実証研究をどのように功利主義的な規範倫理に役立てているかなどを検討する。この検討結果については、2016年にフランスで開催される予定の国際功利主義学会で報告を行い、その後国際誌に投稿する。なお、二次文献の収集にあたっては、申請者が所属する研究科の大学院生の補助を受ける予定である。
2. 認知心理学および功利主義と進化論の関係について、功利主義の専門家との意見交換を行う。具体的には、社会心理学を専門とする北海道大学文学研究科の亀田達也教授との意見交換を行うほか、『生命倫理学と功利主義』(2006)の執筆者の一人でありシンガーやR.M.ヘアの理論について造詣が深い京都女子大学の江口聡教授、また功利主義を始め規範倫理学およびメタ倫理学に造詣が深い英国オックスフォード大学のRoger Crisp教授との意見交換を通じて、研究の進展を図る。

29年度の計画

前年度までの研究を進めると共に、以下の研究を実施する。

1. 「シンガー、グリーン、内井らがどのように功利主義を基礎付けているか」という問いについて、シンガー、内井の文献に加えて、J. Greene, *Moral Tribes*, 2013 およびその書評や関連論文を読み、進化論によって倫理理論が正当化されない場合にどのような基礎付けが可能なのかについて、理論的検討を行う。この作業を通じて、進化論および近年の脳科学や認知心理学を用いた実証研究が規範理論に対して持つ含意についても明らかにする。この検討結果については、日本倫理学会等で報告を行い、その後国内の学術誌あるいは国際誌に投稿する。なお、関連文献の収集にあたっては、申請者が所属する研究科の大学院生の補助を受ける予定である。
2. 以上の研究を通じて得られた知見について、米国プリンストン大学のピーター・シンガー教授と意見交換を実施し、研究の適確さを確認すると同時に、残された課題について明らかにする。
3. 本研究で得られた知見をもとに、申請者の所属する機関で行なわれている「アカデミック・デイ」などの機会において、一般市民向けに「進化論と倫理」についてわかりやすいポスター発表などを行なう。

以上のように、本研究は基本的に申請者が研究代表者として一人で実施する予定であるが、適宜専門家との意見交換を実施する他、申請者が所属する研究科の大学院生の補助を受ける予定である。また、関連研究会(たとえば京都生命倫理研究会や、イギリス哲学会の関西部会等)において定期的に研究内容を報告することで、多くの研究者と意見交換を行なうと共に、研究の進捗に遅滞が生じないように配慮する。

今回の研究計画を実施するに当たっての準備状況及び研究成果を社会・国民に発信する方法

本欄には、次の点について、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。

本研究を実施するために使用する研究施設・設備・研究資料等、現在の研究環境の状況

研究分担者がいる場合には、その者との連絡調整状況など、研究着手に向けての状況（連携研究者及び研究協力者がいる場合についても必要に応じて記述してください。）

本研究の研究成果を社会・国民に発信する方法等

準備状況については、本研究は基本的に文献研究であるため、多くの設備を必要としないが、学内の図書館や電子ジャーナルなどを通じた論文や著作の収集体制が整っているほか、必要な文献は購入あるいは他大学の図書館等から取り寄せるなどして対応する。また、本研究のテーマについては、すでに研究に着手しつつあり、直近では東京大学で開催された「ピーター・シンガーの倫理学と道徳心理学」という題目での報告を行なった(2014年10月18日)。また、研究計画・方法の項で挙げた国内外の研究者とは定期的にメール等でやりとりを行なっているため、面談等を行なうことは十分に可能だと考えられる。

研究成果を社会・国民に発信する方法については、研究計画・方法の項で挙げたように、申請者が所属する機関が毎年実施している一般市民向けの催し等においてポスター発表をする。また、進化論と倫理というテーマに関しては、上記の *An Introduction to Evolutionary Ethics* にも指摘があるように、初歩的な誤解(たとえば進化には目的があるから、倫理もその目的に適ったものであるべき)がしばしば見られるため、申請者個人のウェブサイト等でそのような誤解を解くためのわかりやすい解説を書くことを計画している。

研究計画最終年度前年度の応募を行う場合の記入事項(該当者は必ず記入してください(公募要領19頁参照))

該当しない場合は記入欄を削除することなく、空欄のまま提出すること。

本欄には、研究代表者として行っている平成27年度が最終年度に当たる継続研究課題の当初研究計画、その研究によって得られた新たな知見等の研究成果を記述するとともに、当該研究の進展を踏まえ今回再構築して本研究に応募する理由(研究の展開状況、経費の必要性等)を記述してください(なお、本欄に記述する継続研究課題の研究成果等は、基盤C(一般)-8の「これまでに受けた研究費とその成果等」欄に記述しないでください。)

研究種目名	課題番号	研究課題名	研究期間
			平成 年度 ~ 平成 27 年度

当初研究計画及び研究成果等

応募する理由

研究業績

本欄には、研究代表者及び研究分担者がこれまでに発表した論文、著書、産業財産権、招待講演のうち、本研究に関連する重要なものを選定し、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり、発表年(暦年)毎に線を引いて区別(線は移動可)し、通し番号を付して記入してください。なお、学術誌へ投稿中の論文を記入する場合は、掲載が決定しているものに限り、ます。

また、必要に応じて、連携研究者の研究業績についても記入することができます。記入する場合には、二重線を引いて区別(二重線は移動可)し、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり記入してください(発表年毎に線を引く必要はありません。)

なお、研究業績については、主に2010年以降の業績を中心に記入してください。それ以前の業績であっても本研究に深く関わるものや今までに発表した主要な論文等(10件以内)を記入しても構いません。

例えば発表論文の場合、論文名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年(西暦)について記入してください。

以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。著者名が多数にわたる場合は、主な著者を数名記入し以下を省略(省略する場合、その員数と、掲載されている順番を 番目と記入)しても可。なお、研究代表者には二重下線、研究分担者には一重下線、連携研究者には点線の下線を付してください。

2014 以降

1. Kodama, S. Should We Suffer At All? Sweden-Kyoto University Symposium 2014 (Uppsala University, Sweden). 2014年9月12日.(招待講演)
2. 児玉聡、「医療の効率性と公平性(倫理面)」、『日本内科学会雑誌』、103(6): 1406-1410 (2014年6月10日)。(査読あり)
3. ピーター・シンガー著、児玉聡・石川涼子訳、『あなたが救える命』、勁草書房、2014年6月19日。(翻訳)

2013

4. 児玉聡、「功利主義批判としての「善に対する正の優先」の検討」、『社会科学研究』、64(2):49-72 (2013年3月)。(査読なし)
5. Kodama, S. 'Tsunami-tendenko and morality in disasters', *Journal of Medical Ethics*, (March 2013, doi:10.1136/medethics-2012-100813). (査読あり)
6. 児玉聡、「功利主義者としてのラッセルと20世紀の倫理学の発展」、『日本イギリス哲学会シンポジウム「現代のイギリス哲学--ラッセル『哲学の諸問題』出版100年を記念して」』、於国際基督教大学、2012年3月28日発表。(招待講演)

2012

7. Kodama, S. Tsunami Tendenko and Morality in the disaster situation. Uehiro Carnegie Oxford Conference 2012 (Roppongi, Tokyo). 2012年5月17日.(招待講演)
8. 児玉聡、「功利主義と公衆衛生」、『法哲学年報2011』、有斐閣、7-22頁 (2012年10月)。(査読あり)
9. 児玉聡、『功利主義入門--はじめての倫理学』、ちくま新書、2012年7月 (新書判・224ページ)。(著書)

研究業績(つづき)

2011

10. 児玉聡、「功利主義と公衆衛生」, 日本法哲学会統一テーマシンポジウム「功利主義ルネサンス」, 於一橋大学、2011年11月13日発表。(招待講演)
11. Akabayashi A, Kodama S. Lessons from Japan's March 2011 Earthquake Regarding Dialysis Patients. *Therapeutic Apheresis and Dialysis*. 2011 Jun;15(3):334. (査読あり)

2010

12. 児玉聡、「ハート・デブリン論争再考」, 『社会と倫理』, 24:181-91 (2010年10月)。(査読なし)
13. 児玉聡、『功利と直観--英米倫理思想史入門』, 勁草書房、2010年11月(四六判・340ページ)。(著書)
14. Satoshi Kodama and Akira Akabayashi, "Neither a "person" nor a "thing": The Controversy concerning the Moral and Legal Status of Human Embryos in Japan", in Benjamin J Capps and Alastair V Campbell eds., *Contested Cells: Global Perspectives on the Stem Cell Debate*, London: Imperial College Press, 2010.12:421-439. (査読あり)

2009 以前

15. 児玉聡、「百万人の死は、一人の死の何倍悪いか 道徳心理に関する近年の実証研究が功利主義に持つ含意」, 『倫理学年報』, 理想社、58: 247-259 (2009年3月)。(査読あり)

これまでに受けた研究費とその成果等

本欄には、研究代表者及び研究分担者がこれまでに受けた研究費（科研費、所属研究機関より措置された研究費、府省・地方公共団体・研究助成法人・民間企業等からの研究費等。なお、現在受けている研究費も含む。）による研究成果等のうち、本研究の立案に生かされているものを選定し、科研費とそれ以外の研究費に分けて、次の点に留意し記述してください。

それぞれの研究費毎に、研究種目名（科研費以外の研究費については資金制度名）期間（年度）研究課題名、研究代表者又は研究分担者の別、研究経費（直接経費）を記入の上、研究成果及び中間・事後評価（当該研究費の配分機関が行うものに限る。）結果を簡潔に記述してください（平成25年度又は平成26年度の科研費の研究進捗評価結果がある場合には、基盤C（一般）-9「研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性」欄に記述してください。）。

科研費とそれ以外の研究費は線を引いて区別して記述してください。

若手研究(B)21720005

平成21年度～23年度

「功利主義 VS 直観主義」論争の変遷と現代倫理学における直観の方法論的意義の解明

研究代表者

研究経費 120万円

研究成果：本研究の目的は、西洋倫理思想における功利主義の位置づけおよびその現代的意義を明らかにするという全体構想の一部として、功利主義が常にその論敵としてきた直観主義に焦点を合わせ、思想史における「功利主義 vs 直観主義」論争の変遷と現代の倫理学における直観の方法論的意義を解明することであった。3年間の研究をまとめて京都大学文学研究科で集中講義を行ない、本研究に関する単著（『功利と直観』勁草書房2010年）を公刊した。また、2011年3月の研究会では、本書に関する合評会を行い、研究成果の発表と意見交換を行った。

若手研究(B)24720004

平成24年度～26年度

功利主義と直観主義の論争に対するカント倫理学の影響とその現代的意義の考察

研究代表者

研究経費 150万円

研究成果：本研究の目的は、西洋倫理思想における功利主義の位置づけおよびその現代的意義を明らかにするという研究構想の一部として、これまでの研究で明らかとなった功利主義と直観主義の対立に関して、カント倫理学がいかなる影響を及ぼしているかという新たな視座からの解明を試み、それを通じて、現代倫理学における「功利主義 vs 義務論」という対立軸が持つ意義と問題点を明らかにすることである。研究成果としては、入門書という体裁ではあるが、本研究に基づき、以下の著作を公刊した。児玉聡、『功利主義入門--はじめての倫理学』、ちくま新書、2012年7月。また、ロールズにおける義務論的発想の由来を検討した結果、フランケナの影響の重要性が示唆された。この研究については、関連する研究会で報告するとともに、以下の論文を公刊した。児玉聡、「功利主義批判としての「善に対する正の優先」の検討」、『社会科学研究』、64(2):49-72 (2013年3月)。さらに、関連する国内・国際学会に参加し、公衆衛生や大規模災害における倫理について、功利主義的な見地からの報告を行った。それに基づき、論文として以下のものを公刊した。児玉聡、「功利主義と公衆衛生」、『法哲学年報2011』、有斐閣、7-22頁 (2012年10月)。Satoshi Kodama, 'Tsunami-tendenko and morality in disasters', *Journal of Medical Ethics* (March 2013).

研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性

- ・本欄には、本応募の研究代表者が、平成25年度又は平成26年度に、「特別推進研究」、「基盤研究(S)」、又は「若手研究(S)」の研究代表者として、研究進捗評価を受けた場合に記述してください。
- ・本欄には、研究計画と研究進捗評価を受けた研究課題の関連性(どのような関係にあるのか、研究進捗評価を受けた研究を具体的にどのように発展させるのか等)について記述してください。

該当なし。

人権の保護及び法令等の遵守への対応（公募要領4頁参照）

本欄には、研究計画を遂行するに当たって、相手方の同意・協力を必要とする研究、個人情報の取り扱いの配慮を必要とする研究、生命倫理・安全対策に対する取組を必要とする研究など法令等に基づく手続が必要な研究が含まれている場合に、どのような対策と措置を講じるのか記述してください。

例えば、個人情報を伴うアンケート調査・インタビュー調査、提供を受けた試料の使用、ヒト遺伝子解析研究、組換えDNA実験、動物実験など、研究機関内外の倫理委員会等における承認手続が必要となる調査・研究・実験などが対象となります。

なお、該当しない場合には、その旨記述してください。

該当なし。

研究経費の妥当性・必要性

本欄には、「研究計画・方法」欄で述べた研究規模、研究体制等を踏まえ、次頁以降に記入する研究経費の妥当性・必要性・積算根拠について記述してください。また、研究計画のいずれかの年度において、各費目（設備備品費、旅費、人件費・謝金）が全体の研究経費の90%を超える場合及びその他の費目で、特に大きな割合を占める経費がある場合には、当該経費の必要性（内訳等）を記述してください。

本研究に関しては、国内外の関連文献を体系的に収集する必要がある。そのため、初年度は本研究に関連する図書購入費として和書・洋書を合わせて300千円計上してある（次年度以降は200千円）。また、初年度は申請者および研究補佐をする大学院生用にノートパソコンの購入およびプリンター一台の購入が必要である。さらに、電子資料のプリントアウト等のためにプリンタトナーおよび紙代を計上している。

また、本研究に関しては、その研究領域の広さから、様々な学会や研究会等での報告や意見交換を通じた研究内容の洗練が不可欠である。そのため、各年度とも、国内での成果発表および調査研究（毎年三回程度）のために、150千円ずつ計上してある。さらに、海外における調査研究（英国オックスフォード大学および米国プリンストン大学）および国際功利主義学会（フランス北部）での報告のために、外国旅費を計上している。

さらに、本研究に関しては、文献収集や資料整理に大学院生等の協力を必要とする。そのため、謝金として各年度120千円が必要である。また、専門知識の提供のための謝金を計上している。

最後に、資料や論文等の複写費、英文校正、研究成果投稿にかかる費用として、初年度に30千円、次年度と最終年度に100千円を計上している。

基盤C(一般) - 11
(金額単位：千円)

設備備品費の明細			消耗品費の明細	
記入に当たっては、基盤研究(C)(一般)研究計画調書作成・記入要領を参照してください。			記入に当たっては、基盤研究(C)(一般)研究計画調書作成・記入要領を参照してください。	
年度	品名・仕様 (数量×単価)(設置機関)	金額	品名	金額
27	ノートパソコン×2台(京都大学)	300	功利主義関連図書	150
			進化心理学関連図書	150
			プリンタ×1台	50
			コピー用紙	10
	計	300	計	360
28		0	功利主義関連図書	100
			進化心理学関連図書	100
			プリンタトナー	20
			コピー用紙	10
	計	0	計	230
29		0	功利主義関連図書	100
			進化心理学関連図書	100
			プリンタトナー	20
			コピー用紙	10
	計	0	計	230

基盤C(一般) - 12

(金額単位: 千円)

旅費等の明細 記入に当たっては、基盤研究(C)(一般)研究計画調査作成・記入要領を参照してください。								
年度	国内旅費		外国旅費		人件費・謝金		その他	
	事項	金額	事項	金額	事項	金額	事項	金額
27	研究情報収集 および研究成果発表 (3回×@50)	150			研究補助謝金 (文献調査と 資料整理)	120	文献複写費	20
					専門的知識の 提供	20	研究成果投稿料	10
	計	150	計	0	計	140	計	30
28	研究情報収集 および研究成果発表 (3回×@50)	150	調査研究及び 研究成果発表	500	研究補助謝金 (文献調査と 資料整理)	120	文献複写費	20
					専門的知識の 提供	20	英文校正費用	70
	計	150	計	500	計	140	研究成果投稿料	10
	計	150	計	500	計	140	計	100
29	研究情報収集 および研究成果発表 (3回×@50)	150	調査研究	400	研究補助謝金 (文献調査と 資料整理)	120	文献複写費	20
					専門的知識の 提供	20	英文校正費用	70
	計	150	計	400	計	140	研究成果投稿料	10
	計	150	計	400	計	140	計	100

研究費の応募・受入等の状況・エフォート

本欄は、第2段審査(合議審査)において、「研究資金の不合理な重複や過度の集中にならず、研究課題が十分に遂行し得るかどうか」を判断する際に参照するところですので、本人が受け入れ自ら使用する研究費を正しく記載していただく必要があります。-

本応募課題の研究代表者の応募時点における、(1)応募中の研究費、(2)受入予定の研究費、(3)その他の活動について、次の点に留意し記入してください。なお、複数の研究費を記入する場合は、線を引いて区別して記入してください。具体的な記載方法等については、研究計画調書作成・記入要領を確認してください。

「エフォート」欄には、年間の全仕事時間を100%とした場合、そのうち当該研究の実施等に必要となる時間の配分率(%)を記入してください。

「応募中の研究費」欄の先頭には、本応募研究課題を記入してください。

科研費の「新学術領域研究(研究領域提案型)」にあつては、「計画研究」、「公募研究」の別を記入してください。

所属研究機関内で競争的に配分される研究費についても記入してください。

(1) 応募中の研究費

資金制度・研究費名(研究期間・配分機関等名)	研究課題名(研究代表者氏名)	役割(代表・分担の別)	平成27年度の研究経費(期間全体の額)(千円)	エフォート(%)	研究内容の相違点及び他の研究費に加えて本応募研究課題に応募する理由(科研費の研究代表者の場合は、研究期間全体の受入額を記入すること)
【本応募研究課題】 基盤研究(C)(一般) (H27~H29)	功利主義と進化論の理論的・思想的関係についての研究(児玉聡)	代表	980 (3120)	15	(総額 3120 千円)
新学術領域研究(研究領域提案型)(H27~H29)	効率化に起因する救急医療システムの問題の医療倫理的検討(児玉聡)	代表	2100 (5700)	10	本研究は救急医療システムの資源配分に関する医療倫理学的研究であり、本応募研究課題とは直接のつながりをもたない。(総額 8100 千円)

研究費の応募・受入等の状況・エフォート(つづき)					
(2) 受入予定の研究費					
資金制度・研究費名(研究期間・配分機関等名)	研究課題名(研究代表者氏名)	役割(代表・分担の別)	平成27年度の研究経費(期間全体の額)(千円)	エフォート(%)	研究内容の相違点及び他の研究費に加えて本応募研究課題に応募する理由(科研費の研究代表者の場合は、研究期間全体の受入額を記入すること)
基盤研究(B)(一般)(H25~H27)	「組織の社会的責任」に関する哲学・倫理学的研究(水谷雅彦)	分担	200千円(600千円)	10	本研究は現代の組織(企業・大学等を含む)の社会的責任について考察するものであり、応募する研究課題とは直接の繋がりをもたない。
基盤研究(B)(一般)(H26~H28)	世界における患者の権利に関する原理・法・文献の批判的研究とわが国における指針作成(小出泰士)	分担	200千円(600千円)	5	本研究は患者の権利に関する指針等の国際比較研究であり、応募する研究課題とは直接の繋がりをもたない。
基盤研究(B)(一般)(H26~H28)	再生医療新法時代の生命倫理ガバナンス:基礎・臨床研究から医療応用まで(位田隆一)	分担	150千円(450千円)	5	本研究は生命倫理に関わる指針や法等のガバナンス体制に関する研究であり、応募する研究課題とは直接の繋がりをもたない。
融合チーム研究プログラム(SPIRITS)(H26-27,京都大学)	京都大学を拠点とする領域横断型の生命倫理の研究・教育制の構築	代表	1427千円(3288千円)	5	本研究は京都大学を中心とした生命倫理の研究拠点を作る試みを行なうものであり、応募する研究課題とは直接の繋がりをもたない。
(3) その他の活動 上記の応募中及び受入予定の研究費による研究活動以外の職務として行う研究活動や教育活動等のエフォートを記入してください。				50	
合計 上記(1)、(2)、(3)のエフォートの合計				100(%)	